

複合動詞関連 2 テキスト論文&設問リスト [2014 年度後期]

● 総論

- ① 須賀一好 1984 「現代語における複合動詞の自・他の形式について」『静岡女子大学 国文研究』17, pp.1-13.

[論文①についての設問 1] 2014/10/03 (金)

本論文 pp.3-4 の表 2 に示されているように、複合動詞の自動詞形と他動詞形において上位要素と下位要素のどちらか一方または両方が自・他のペアを示すものには、① [(自)(自)] - [(他)(他)]、② [(自)(自)] - [(自)(他)]、③ [(他)(自)] - [(他)(他)]、④ [(無)(自)] - [(無)(他)]、⑤ [(自)(無)] - [(他)(無)] の 5 通りがあります。これらのうち、①に相当する自動詞形－他動詞形の例を二つ以上、②～⑤に相当する自動詞形－他動詞形の例をそれぞれ一つ以上、本論文中に掲げられているものは除いて、ご自分で探してください。さらに①に相当する自動詞形－他動詞形の例については、その自動詞形と他動詞形が「対応」を示すか否かについても論じてください。

[論文①についての設問 2]

本論文 p.6 で筆者は自動詞形「うまれおちる」について「『生まれる』と同じ意味で使用されているといえる」と述べ、他動詞形「うみおとす」について「『うむ』と同じ意味の語として使われる」と述べていますが、「うまれおちる」と「生まれる」および「うみおとす」と「うむ」は全く同じ場面・状況で使用されるわけではありません。それぞれについて両者の交換が困難な例を示しながら意味や用法の違いについて論じてください。また、「うまれおちる」と「うみおとす」の「対応」を示さない意義についても指摘してください。

[論文①についての設問 3] 2014/10/10 (金)

本論文の「〔乙〕 [(自)(自)] - [(他)(他)] の形式のほかに、新たに、自動詞形、他動詞形が派生されたもの」(p.6, 下段)の中の、「すでに [(自)(自)－(他)(他)] という形式で存在し、さらに派生が生じる場合」(p.6 下段～p.7 上段)(⑨、⑩、⑪)は、他動詞形が一つの語形で「自動詞形が [(自)(自)] と [(他)(自)] の二語形併存になる」(p.9, 下段)もの〔下記の他の例も参照〕のみで、その逆に自動詞形が一つの語形で他動詞形が [(他)(他)] と [(自)(他)] の二語形併存になるものは存在しません。それはどうしてか、あなたなりの理由説明を試みてください。

[他の例：寄り集まる・寄せ集まる－寄せ集める、焼け上がる・焼き上がる－焼き上げる、抜け出る・抜き出す(・抜け出す)－抜き出す、冷え固まる・冷やし固まる－冷やし固める]

- ② 李 良林 2002 「語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせ－再帰性に基

づく多動性の観点から一」『言語科学論集』第6号，東北大学大学院文学研究科，
p.13-24.

〔論文②についての設問4〕 2014/10/18(土)

本論文の筆者は「4-1. 『他動性調和の原則』に反する例」(pp.19-21)の中で、①-A(p.19)や②(p.20)の組み合わせの複合動詞が他動性調和の原則に反するにもかかわらず成立することについて、他動詞の再帰性に基づく自動詞化の観点から論じようとしています。しかし、個々の他動詞が再帰性を帯びているかどうかの判断はかなり直観に頼っており、必ずしも明確ではないと思われます。本論文 pp.16-17 で言及されている笠井(1988)および中嶋(1993)における「再帰性」や「再帰動詞」に関する記述を参考にして、筆者の議論について個々の複合動詞に即して批判的な検証を行ってください。また、もし可能であれば、上記の組み合わせの複合動詞が成立することについて、筆者の議論を補強する形で理由の説明を試みてください。

(参考) 中嶋(1993)による他動詞原型および典型的自動詞と3つの中間段階(pp.85-90)(本論文 p.16, 表1も参照のこと)

- a. 2つの異なった実体が動詞によって表わされたできごとに関与し、この2つはそれぞれ動作主と目的語という異なった役割を担っている。(他動詞原型)
例：赤ん坊が花瓶を壊した。
- b. 2つの異なった実体が関与していて、意味的に異なった役割をもっていたその2つの実体が、動詞によって表わされた変化の結果として1つの実体に一体化される。(後天的再帰)
例：店は客のカメラを修理に預かった。
- c. ただ1つの実体(あるいは全体とその部分)が2つの異なった意味役割を引き受けていて、シンタックス上は2つの異なった実体として文中に現われる。(先天的再帰)
例：犬がしっぽを垂れる。
- d. ただ1つの実体が関与していて、シンタックス的にもただ1つの実体として現われるが、それは2つの異なった意味的役割を担っている。(内在的再帰)
例：おばあさんがかがむ。
- e. ただ1つの実体が関与しているだけで、その意味的役割も(意味上の)目的語という1つの役割だけである。(典型的自動詞)
例：花瓶が壊れた。

③ 陳 劭憐 2010 「語彙的複合動詞の自他交替と語形成」『日本語文法』10巻1号，
pp.37-53.

〔論文③〕についての設問 5〕 2014/10/24 (金)

筆者は「2. 手段複合動詞の自他交替」(pp.39-46)において、まず 2.1 で手段複合動詞の自動詞化例を(5) a.~d.(p.40) の 4 種類に大別した後で、2.2 で (14) 結果一致性の仮説 (p.43) に基づいて、(5) a.に属する「吊り下がる」について LCS と項構造の連結関係を (16) (p.44) のように説明しています。しかし、この (16) の図式は (5) b.から (5) d.へと進むにつれて、個々の複合動詞への適用が難しくなると考えられます。(5) b.~d.に属する個々の複合動詞に言及しながら、(16) の図式の適用範囲について具体的に論じてください。また、もし可能であれば、(16) の図式を (5) b.~d.に属する複合動詞にも適用出来る形に修正することを試みてください。

〔論文③〕についての設問 6〕 2014/10/31 (金)

筆者は「3. 完了を表す「～あげる」補文関係複合動詞の自他交替」(pp.47-51)において、「～あげる」と「～あがる」が自他対応を表すには (22) (pp.47-48) のように完成品の産出を意味する作成動詞を V1 に取る必要があり、(23) (p.48) のように作成動詞以外の動詞を V1 に取る「～あげる」には自他対応が見られないと述べています。しかし、次に掲げるような「～あげる」は、作成動詞を V1 に取っていると見なせるにもかかわらず、自他対応が見られません。

- a. 作り上げる、育て上げる、描き上げる、掘り上げる
- b. *作り上がる、??育て上がる、??描き上がる、??掘り上がる

また、(22) b.に掲げられているものの中でも、「刻み上がる」、「磨き上がる」、「結わえ上がる」などは実際には用例が極めて少ないことが観察されます。これらの「～あげる」が自他交替できない(しにくい)点に着目して、(29) (p.50) の図式による「～あげる」と「～あがる」の自他交替の説明の適用範囲について論じてください。また、もし可能であれば、これらの「～あげる」が自他交替できない(しにくい)理由を、(28)、(29)、(30) (pp.49-50) を修正した図式を使って説明することを試みてください。

④ 何 志明 2002 「『様態・付帯状況』の複合動詞の組み合わせ」『日本語と日本文学』 35, 筑波大学国語国文学会, pp.31-48.

〔論文④〕についての設問 7〕 2014/11/14 (金)

筆者は本論文 p.41, (29)(30)(31)の動詞分類において、「出る」という動詞を「変化を表わす動詞」、「経路位置関係を包入した動詞」((30), (ii)) に含めています。筆者はこの分類を踏まえて、その後の部分で、「様態・付帯状況」の複合動詞の V1 と V2 の組み合わせについて、それぞれの動作の持続時間の制限という観点から説明しようとしています。その中で「出る」が V1 になる場合(「客を)出迎える」)については①のように述べており、その後で一般論として述べている②の箇所との整合性を欠いていることが指摘できます。

- ① 「(13) (ii) の『(客を)出迎える』のような V1 が変化を表わす動詞の組み合わせの場合、例えば、自宅を出た(出ている)状態が継続していると同時に、客を迎える。すなわち、『迎える』を示す『様態・付帯状況』は『出る』の結果変化状態の継続ということである。」(p.42, 最下行～p.43, l.3)
- ② 「(これを一般化すると、) V1 が表わす出来事の持続時間は V2 が表わす出来事によって決められる。変化動詞の場合、結果変化が生じた後、結果変化の状態が残存する(静止状態に入る)。このような結果変化は別の動作の『様態・付帯状況』にはなりにくい。」(p.43, ll.20～23)

また、その後で「(従って、) 全体的に変化動詞は V1 になりにくいと言える」(p.43, l.26) と述べていますが、p.38, (13) (ii) 「『V1+V2』が『変化を表わす動詞+動作を表わす動詞』の組み合わせ」はその例外と見なすことが出来、その中には「出る」を V1 とする複合動詞のみが例として掲げられています。

これらの点に着目して、「出る」という動詞の語彙的アスペクトに見られる特殊性について、なるべく具体例を示しながら論じてください。

● 各論

- ⑤ 陳 劫憚 2013 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について－『出す』を対象として－」 影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端－謎の解明に向けて』ひつじ書房, pp.47-73.

[論文⑤についての設問 8] 2014/11/28 (金)

統語的複合動詞と語彙的複合動詞における補文関係複合動詞との違いを、なるべく簡潔に説明してください。

[論文⑤についての設問 9]

語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いは、本論文 p.48, (2) の図に記載されているように、前項動詞だけを①代用形「そうする」、②尊敬語、③「～する」の形の漢語動詞、で置き換えることが可能かどうかといった言語現象に現れます。

本論文では、「～出す」における LCS 合成に、(24)「蹴り出す」(他動詞・手段複合動詞)(p.60) → (26)「飛び出す」(非能格自動詞・補文関係複合動詞)(p.60) → (29)「流れ出す」(非対格自動詞・補文関係複合動詞)(p.61) → (32)「泣き出す」(統語的複合動詞・補文関係複合動詞)(p.63) という派生方向を認め、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の間に、一定の連続

性・派生関係が存在していると述べています。上記の①、②、③の置き換えをこれらの4つのグループに属する複合動詞に適用して、各グループの語彙的複合動詞的な性質と統語的複合動詞的な性質の度合いについて論じてください。

⑥ 由本陽子 2013 「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 ひつじ書房, pp.109-142.

[論文⑥についての設問 10] 2014/12/12 (金)

本論文の Table 2 (p.116) には対応関係を有する他動詞と自動詞のペアが多く見られ(「出す」－「出る」、「上げる」－「上がる」、「つける」－「つく」、「入れる」－「入る」、「立てる」－「立つ」、「かける」－「かかる」)、しかもいずれも他動詞の方が自動詞より「V1の異なり語数」の数値が高くなっています。一方、Table 1 (p.115) にはそういったペアは見られません。その理由について、可能であればLCSを援用して、(1)(A)～(E) (pp.109～110) の分類にも言及しながら、あなたなりに説明を試みてください。

[論文⑥についての設問 11]

p.117, (9) のように、直接複合動詞を作ることができず、動名詞を作って「する」と結合する形が用いられるV1+V2の例をなるべく多く探して、(1)(A)～(E) (pp.109～110) の分類との関係に見られる傾向について述べてください。

(参考) Vendler (1967) による語彙的アスペクトの4分類の公式化

(A) 状態 (state): know, believe, have, desire, love, etc.

[]y BE AT-[]z

(B) 活動 (activity) または過程 (process): study, run, walk, swim, push a cart, drive a car, etc.

[]x ACT または []x ACT ON-[]y

(C) 到達 (achievement): recognize, spot, find, lose, reach, die, etc.

BECOME [[]y BE AT-[]z]

(D) 達成 (accomplishment): paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, recover from illness, etc.

[]x CAUSE [BECOME [[]y BE AT-[]z]]

[論文⑥についての設問 12] 2014/12/19 (金)

「入る」や「埋める」という動詞は語彙的に「内部への方向性の意味」を持つため、構成役割の表示は(17) (p.122) の「～込む」の場合と基本的に同じになると考えられます。「入る」と「入り込む」および「埋める」と「埋め込む」の違いは、本論文における記述の枠組みを用いてどのように説明され得るか考えてください。

〔論文⑥についての設問 13〕 2014/12/27 (土)

姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房, pp.252-253 (添付の pdf ファイル参照、12月26日(金)の授業に出席された方にはコピーを配布しました) の「~つく」と「~つける」の複合動詞のリストを参照して、適宜具体例を示しながら、本論文第5節 (pp.131-138) における議論の限界や問題点について、なるべく整理した形で論じてください。また、もし可能であれば、その解決のためのあなたなりの方向性を示してください。なお、このリストで下線を引いてある複合動詞は、共通の V1 を持つ「~つく」と「~つける」のペアを構成するものです。

⑦ 由本陽子 2005 「『V+かえる』と『V+直す』の意味と統語」『日本語文法』5巻2号, pp.110-127.

〔論文⑦についての設問 14〕 2015/01/09 (金)

本論文の 3.2 (pp.120-122) に掲げられている、V1 が作成動詞の場合の「V+かえる」と「V+直す」の例文のペア (22) a, b (p.120)、(26) a, b (p.122)、(27) a, b (p.122) (全部で 9 組) について、個々の例文の容認度を、お知り合いの日本語母語話者の方に最低 2 名に「1: 完全に容認できる、2: ほぼ容認できる、3: やや容認できる、4: やや容認できない、5: ほぼ容認できない、6: 完全に容認できない」の 6 段階で評価していただき、報告してください。各受講者の方について異なる日本語母語話者の方に尋ねていただくようご配慮ください。

〔論文⑦についての設問 15〕

次の「V+かえる」と「V+直す」のペアは、いずれも意味や用法の違いが微妙であると考えられます。それぞれの例文を掲げて、両者の意味や用法の違いをあなた自身の言葉で説明してください。さらに、その例文について、本論文の第3節 (pp.117-126) に提示されている「V+かえる」と「V+直す」がほぼ同義で交替可能となる条件に関する議論との対応について論じてください。

(1) 並べ替える / 並べ直す (2) 選びかえる / 選び直す (3) 移し変える / 移し直す

なお、解答にあたっては、次の点に留意してください。

1. (1)と(2)は「TYPE としての目的語」(p.125, 3.4) を取り得る。
2. (2)の「選ぶ」は個々の要素に注目する場合には「xはyをzに選ぶ」という構文を取り得る。

⑧ 松本 曜 2009 「複合動詞『~込む』『~去る』『~出す』と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の意味と文法』くろしお出版, pp.175-194.

[論文⑧] についての設問 16]

本論文 p.187, (33a) のような、非対格自動詞を前項として「出す」を後項とする複合動詞について、p.188 に述べられている影山(2002)ではこの「出す」が「非対格他動詞」(下記の「参考」参照)に属するとして他動性調和の原則に基づく説明を行っていますが、本論文 pp.188-190 ではこの「出す」が移動動詞であるとして説明しています。この両者の間には、影山(2002)が前項動詞を主要部と考えているのに対して、本論文では後項動詞「出す」を主要部と考えているという相違点があります。(以下の引用部参照)

p.188, ll.8-9 : 「また、(33a)が非対格自動詞として実現しているのは、前項動詞が主要部であるためだという。」

p.189, ll.12-13 : 「以上の現象は、(33a, b)の「出す」が移動動詞であり、意味構造における主事象として全体が取る項とその格を決めていると考えれば、説明がつく。」

あなたがこの両者のうちどちらをより支持するかについて、必要に応じてご自分で探した例文を提示しながら、理由を添えて述べてください。

(参考) 影山(2002)では、他動詞として用いられる際の英語の *gush* や日本語の「生じる」などのように、場所名詞を主語にする他動詞を「非対格他動詞」と呼んでいます。非対格自動詞の例文と対比させてその例文を示すと、次のようになります。

非対格自動詞 / 非対格他動詞

Oil gushed from the tanker. / The tanker gushed oil (from several cracks).

コンピュータ(の心臓部)にミスが生じる / コンピュータが(その心臓部に)ミスを生じる

木(の枝先)に/から芽がふく / 木が(その枝先に/から)芽をふく

木から芽が出る / 木が芽を出す 火口から煙が出る / 火山が(火口から)煙を出す

これらの中では、*gush* や「生じる」、「ふく」が同一形態で非対格自動詞と非対格他動詞の交替を示すのに対して、「出る」 / 「出す」の場合には、非対格構造における自他交替が形態に反映されていると言えます。